

博物館だより

第51号

2000.9.20

Nagano City Museum



長門町「信州和紙の里・長門町ふるさとセンター」において

うちわ 手作り団扇の完成だよ!!

8月18日(金)、長門町の「信州和紙の里・長門町ふるさとセンター」において、団扇作りの体験講座を行いました。参加者は親子20人。長門町はかつての「立岩紙」の産地として、おもに障子紙を作っていました。

講座は、第44回特別展「風土がはぐくんだ信濃の和紙」の関連企画として行いました。

参加者の多くが紙漉き体験が初めてで、講師の高柳一さんに丁寧に手順を教わり挑戦しました。

漉き紙に和紙の原料を流し込んで前後左右にゆすります。その上に団扇の骨を置いてさらに原料をか

けます。そこに、色のついた和紙の原料で各々独創的な絵や模様を書いて乾燥させます。挑戦して約1時間、オリジナル団扇の完成です。

参加者からは、「難しかったけどとても楽しかった」、「紙を作る大変さがわかった」、「もう一度挑戦してみたい」などの感想が聞かれました。

完成した団扇は一部博物館のロビーで展示しました。

(降幡浩樹)

お経の裏にも文字が！—丸子町^{れい せん し}靈泉寺^{しょうそくきょう}の消息経—

今年度夏の特別展は、「風土がはぐくんだ信濃の和紙」を開催しました。信州の和紙の歴史は古く、8世紀には「信濃」を冠する和紙が漉かれていたことが正倉院文書に見られます。古代・中世には、紙は高価なものとして寺社など一部の人にその利用は限られていましたが、江戸時代に入ると信州各地でその風土を利用した紙漉きが行われました。18世紀には、文字や絵を書くといった紙本来の利用から、傘や元結、一閑張から子供の玩具にいたるまで丈夫で、加工しやすく身近で安価な生活文化材としてその需用は大きく伸びました。

その中で、今回は2件の像内納入文書を取り上げました。仏様の像内にはさまざまな品物が納められた例が知られています。それらは像内（あるいは胎内）納入品と呼ばれ、内容から大きく二つに分けられます。一つは、小さい仏像・舍利・五輪塔・「法華経」や「般若心経」などの經典、真言などいわば仏像に魂を入れるといった意味合いの品物。もう一つは願文や結縁者の名前、故人の消息、遺髪、遺品など願主たちの祈りが仏像とともに永遠に残ることを願って納入したと考えられるものがあります。

一度納められた文書は、修理や調査などの過程で偶然発見される事が多いため、現在に至る迄人為的に選択・廃棄されることが少なく、当時の文書が表装などを受けずにそのまま残されている可能性が高く、紙そのものの研究においても最適だと考えられます。

そこで、丸子町靈泉寺に伝わる木造阿弥陀如来坐像（長野県宝）の像内納入品を見てみましょう。この阿弥陀如来像の中には、右表のような16件、28点の品物が納められていました。「新添」と書かれた3点は、明治11年（1878）に本像が安置されていた阿弥陀堂が焼失したため、新たに時の住持大安によって納入されたものです。納入という行為が大きな節目に行われ、納入品が追加された例です。

それ以外の納入品は、今から685年前の正和4年



木造阿弥陀如来坐像（丸子町 靈泉寺）



金剛般若経の裏に書かれた消息（丸子町 靈泉寺）

（1315）に像内に納められたものです。今回の調査で、像内に納められていた6つのお経の内、「金剛般若経」と「光明真言」の裏に、文字が書かれていることがわかりました。「金剛般若経」の裏には、流麗な仮名散らし書きの消息が書かれています。1紙が最大で49.4cmの紙を13紙つなげて一巻とし、複数の消息が貼られ、お経への改変のため一部は文字が切れています。宛名や差出人は記されていませんが、嘉元4年（1306）7月14日、徳治2年（1307）10月2日の2つの年号が書かれ、表（本来は裏）の金剛経より7、8年前に書かれた文書です。

一方光明真言は、この像の造立者である本然（平繁長の法名）によって書かれた消息の裏に写経され、お米が何かを52合受取ったという趣旨の文書です。先の嘉元・徳治の年号を持つ文書も、本然自身の筆によって書かれた消息を裏返して使っ

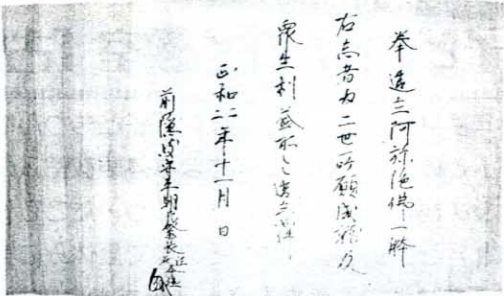
た消息経であると考えられます。

造立者である平繁長は、東条荘の水内郡和田郷（古牧東・西和田）と高井郡狩田郷（小布施町）、水内郡長池郷（古牧南長池・朝陽北長池）の一部や霊泉寺のある小県郡依田荘（丸子町等）の一部などを所領とする和田氏一族です。この一族には三河入道・隠岐入道・石見入道の3つの門流がありました。

元享3年（1323）、鎌倉円覚寺での北条貞時十三回忌では、和田隠岐入道が馬を一匹寄進し、嘉暦4年（1329）当時、東条荘狩田郷内東条村に所領を有していたことなどが記録に見られます。この隠岐守は平繁長である可能性もあります。

同じ一族の和田石見入道は、文永2年（1265）、仏阿が善光寺奉行人として知られています。正応3年（1290）に後深草院の女房二条が善光寺に参詣する際に宿を提供し、信濃の片田舎には過ぎたゆえある住まいと驚かせるほど立派な館に住んでいたと『とわずがたり』に記されています。和歌や管弦に通じた歌人でもありました。

当時荘園に下った国司など中流以下の貴族は、周辺の武士や農民を郎党や雑色人に編成し、主従関係を拡大しつつ、武士団を形成する一方で、朝廷や院・女院などの「侍」や蔵人・判官などとして仕え、官職や位階にありつこうと都と強いパイプを持ちつづけていました。今回見つかったお経



平繁長願文（霊泉寺）

の裏の流麗な仮名書きの文字は、こうした新しい社会的身分である武士層の当時のありかたを示す貴重な史料といえます。

紙の質について触れれば、平繁長の願文は厚い良質の楮紙（楮の繊維で作った紙）で、像内に納められた他の紙と区別されていたことがわかります。また、佛説阿弥陀経と金剛般若経は木版摺りされたもので、斐紙（雁皮の繊維で作った紙）に書かれています。

像内納入文書は、後世の補修や修理などで偶然見つけられることが多く、それらの文書は、願主の意図からすれば、他人や後世の人々の目にふれることを予期していないため、一般の文書と異なり、無病息災や家門の繁栄を願う心情が正直に表されており、各時代の人々の意識や心情を伺う上で貴重な史料といえます。

（降幡浩樹）

霊泉寺 木造阿弥陀如来坐像像内納入資料						
品名	年代	寸法(縦×横単位cm)	紙質	形状	奥	書
仏面 その1		20.4×16.0				
その2		17.7×12.3				
仏舎利包紙		31.5×56.0				
佛舍利		15.4×21.2				
新添 珊瑚 大安準謹納		16.7×9.7	宿紙			
新添 沈水香		23.9×13.0				
新添 琥珀		12.7×13.9				
五香 沈						
白檀						
生木香						
丁香						
薰陸						
五類 瑠璃						
真珠						
金						
銀						
水精（晶）						
五葉 胡椒						
人參						
縮砂						
橘皮						
甘草						
平繁長願文	正和4年(1315) 11月 日	34.4×59.6	楮紙	1紙	前隠岐守平朝臣繁長法名本然	
三部(佛眼真言・一字金輪・宝篋印陀羅尼)	正和4年11月3日	33.5×52.0	楮紙	1紙	霊泉寺住持比丘源興	
佛説阿弥陀経	正和2(??)年 (1313)	25.5×7.1	斐紙	折本	比丘源興	
般若心経	正和4年11月4日	28.5×39.0	楮紙	1紙	霊泉住持比丘源興	
光明真言・阿弥陀呪・阿弥陀小呪	正和4年11月3日	26.7×42.5	楮紙	1紙	霊泉比丘源興	
金剛般若経	正和3年	23.6×604.5	斐紙	折本		
佛頂尊勝陀羅尼	正和4年11月3日	28.2×63.9	楮紙	継紙	霊泉寺住持比丘源興	

子どもわんぱく教室「古代にタイムスリップ体験」開催

今年度は、小中学生を対象に「子どもわんぱく教室」と題して年間でさまざまな体験教室（カブトムシの飼育と観察・陶板を作ろう・たこを作ろうなど）を企画しました。その中で夏休みに実施した「ため池の生き物観察」、「紙すきに挑戦」、「古代にタイムスリップ体験」のうち8月10日と11日に実施した標記の教室を紹介します。

新聞等では、連日のように発掘のニュースが報道されています。長野市内でも、年間を通して私たちの身近なところで発掘調査が行われています。発掘調査を通じて身近な歴史に興味を持ってもらおうと長野市埋蔵文化財センターと協力して、小中学生と保護者を対象に体験教室を企画しました。

第1日目の午前中は、開講式・ガイダンス・事前学習（遺跡とは何か、遺跡はどこにあるのか、発掘調査とは何か、いつの時代にタイムスリップするのかなど）を行い、午後発掘現場に出かけました。出かけた先は、現在長野市埋蔵文化財センターが発掘調査を行っている「篠ノ井遺跡群」（篠ノ井塩崎）です。調査の担当者から遺跡の概要、道具の使い方、注意事項などの説明を受けて、いよいよ発掘の開始です。今回の教室のために、準備してもらった竪穴住居を発掘しました。住居の中の土を注意深く少しずつ掘りながら作業していくと、土器のかけらや鉄のかたまり、焼け土、炭、骨粉などが出てきました。

出土した土器をみると、この竪穴住居は、平安時代代ということがわかり、約1000年前にタイムスリップしたことになります。

参加者は、暑さも忘れて古代の宝探しに夢中になりました。茶色の土器、ネズミ色の土器が出てくたびに参加者の顔は、笑みであふれました。

第2日目は、午前中が昨日に引き続いて発掘作業。2日間にわたった発掘はあっという間に終わり、午後は博物館にて、発掘された出土品の整理状況（水洗い・接合・復元・実測など）と収蔵庫を見学しました。また、今回発掘した土器と似たものを常設展示室で見学し、タイムスリップした時代を再確認しました。参加者は、しっかりと発掘体験を心に刻み込んだようでした。

【参加者の声から】

○ほくは、前から昔の土器や石器などを掘って見つけたかったのでとても楽しかった。発掘現場に行った時、もっと大きな土器が残っているのかと思ったけど、小さなかけらばかりでびっくりしました。だけど掘っているうちにだんだんと「どんな形になるのかな」とか「これはどこの部分になるのかな」とか想像をするようになりました。

○発掘体験をして、とても楽しいおもしろい気持ちになりました。自分で初めて掘った土器は、私をすごく感動させました。

○2日目に収蔵庫を見たけど色々な土器があって、おもしろかった。博物館の見学では、いろいろな土器を見て、「このような土器になるんだな」とさらに納得しました。

○今回初めて歴史を語る上でもととなる発掘に触れ、驚きの連続でした。住居跡の説明を聞いて、当時の人々の姿がよみがえってきたように感じ、歴史の時空を身近に感じることができました。収蔵庫では、本物に直接触れることができた点も感激でした。触れることで感じとれる歴史があるんだなと思いました。

○博物館へは、今までなんとなく来て見ていたが、展示に至るまでにこんなにたくさんの人の手や心が関わっていることを知り、昔のものを見るだけのところという博物館に対する見方が変わりました。

○今直前まで火を使っていたようなススが1000年も前のものだと思うと、本当にタイムスリップしたようでした。

（山口 明）



▲竪穴住居を掘る

皆既月食を見る会

～200人以上の人が集う～

【珍しい月食】

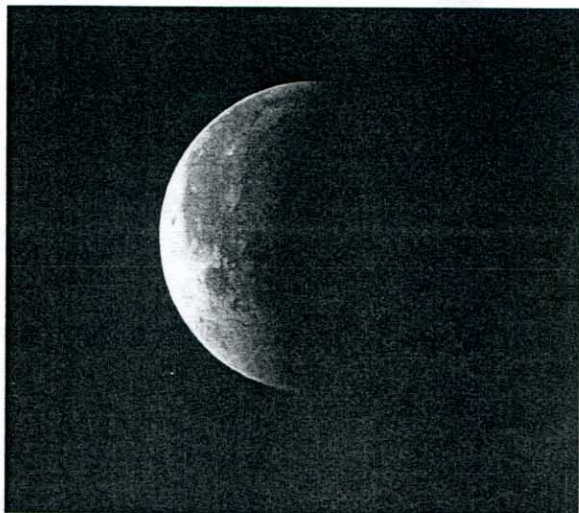
2000年7月16日。この日は今年一番待ちこがれていた日でした。それは久しぶり…なんと10年ぶりに皆既月食が見られる日だからです。日本で見られる皆既月食は1997年、1993年にも起こっていますが、長野では両者とも雲に阻まれほとんど見えませんでした。

また、今回の月食は皆既継続時間が1時間47分もある最長とも言える珍しい月食でした。マスコミも「これ以上の月食は今後100年以上、あるいは300年以上見られない。」と大きく報道したのも多くの人の興味をそそりました。間違いなく、これ以上長い皆既月食は私たちが生きているうちには見られないでしょう。しかし、ご心配なく、皆既月食は今後もたくさん起こります。

【観望会】

7月16日（日）。午後8時30分頃にはもうたくさん参加者が集まって来ていたため、午後9時からの予定を早めて観望会を始めました。

友の会の天文同好会「しなの星空散歩会きらきら」の皆さんのサポートもあって、望遠鏡3台、双眼鏡3台、フィールドスコープ1台が並び、参加者は順次のぞいていきました。月は刻一刻と欠けていきます。皆既になるずいぶん前から欠けた



復元していく月（0時17分）

部分が赤黒く染まってきているのが確認でき、皆既に入る直前には何とも言えない奇妙な月の姿を見せてくれました。参加者の一人は『『いくら』みたいだね。』と表現していました。その素晴らしい想像力に脱帽です。

皆既に入り、30分ぐらいうると無情にも雲が南から覆ってきました。赤い月も見えなくなったため、スライドやビデオを上映し、月食や星の解説をしばらくの間行い、雲が切れるのを待ちました。

午後11時30分になってもなかなか雲が切れません。翌日は月曜日ということもあり、がんばっていた参加者の多くは、家路につき始めました。皮肉なことに皆既が終わった頃雲は切れはじめ、やがて雲一つない素晴らしい天気になったのです。おそろく家についた頃、皆さんは復元し始めた月をながめていたのではないのでしょうか。

親子で来られた方が多かった月食観望会ですが、お子さんにとっては、「初めての皆既月食」だったと思います。あの不思議な月をしっかりと目に焼き付けてもらえたことと思い、私も久しぶりの皆既月食が見られたことに幸せでした。

次の皆既月食は、2001年1月10日未明に起こります。

（大蔵 満）



観望会の様子

クジラ化石は語る

茶臼山自然館では、7月20日(祝)から9月24日(日)まで、企画展「クジラ化石は語る」を開催しています。この企画展では、去年の5月に七二会(飯森)で発掘したクジラの脊椎骨化石をはじめ、市内から見つかった他のクジラ化石や現在のクジラの骨など31点を展示しています。

企画展の目玉は、約600万年前の論地層という地層から見つかった、七二会のクジラ化石です。去年の発掘の際に周りの岩ごと採取してきた化石を数ヶ月間かけてクリーニングし、ようやく全体の形がわかるようになり、今回の公開となりました。見つかった部分は腰から尾にかけての脊椎骨(背骨)で、8個の骨が互に関節でつながった状態で埋まっていました。脊椎骨8個をつないだ長さは約1.5mもあります。このような発掘状況から、見つかった化石がすべて同じ1頭のクジラのものであるということがわかります。1頭のクジラの骨がたくさんまとまって見つかった例は、県内でこれまで数例しかなく、とても貴重な化石です。

ところで、クジラは、魚とよく似た姿をしていますが、私たち人間と同じ哺乳類の仲間です。クジラにはいろいろな種類があるのですが、大きくヒゲクジラ類とハクジラ類の2つに分けることができます。七二会から発掘されたクジラ化石は全て脊椎骨であり、重要な頭やあごの骨と一緒にみ

つかっていないので、種類を調べるのが困難です。でも骨がかなり大きいので、ヒゲクジラ類か大型のハクジラ類であることは間違いありません。この化石に認められる椎体(前後の脊椎と関節でつながる、短い円柱状の部分)の前後の長さが直径と比べてやや短いという特徴は、ヒゲクジラ類の中のセミクジラ類やコククジラ類の骨にみられる特徴です。したがって、セミクジラ類かコククジラ類の骨である可能性がまず考えられますが、これからもっと詳しく調べて見る必要があります。

長野市内からは、これまでにクジラ化石がいくつも見つかっています。クジラの化石の多くは、浅川の周辺に広がる浅川泥岩層という約800万年前の地層や、約600万年前の論地層から発見されています。また、市内の犀川の河原からも、上流から流されてきた岩石の中からクジラの化石がいくつも見つかれています。現在の長野は海から遠く離れていますが、大昔の長野はクジラたちの楽園だったのです。

なお、今回展示した七二会産のクジラ化石は、10月2日(月)から12日(木)まで、長野市役所第一庁舎2階ロビーで展示します。

(畠山幸司)



▲ 展示室のようす



▲ 七二会産クジラ化石

ミレニアム 博物館まつり開催

9月23日は、19回目の博物館開館記念日です。今年は、23日・24日と連休になるため、開館を記念する「博物館まつり」を2日間にわたり友の会と共催で開催します。

今年は、2日間を盛り上げるべく例年になくいろいろな催しを企画しています。初めての企画としては、前庭でのフリーマーケットの開催です。また、博物館エントランスロビーでは、2日間ともコンサートを行います。

23日には、風間神社太々神楽獅子舞（長野市指

定無形民俗文化財）の実演、24日には大道芸の実演などを予定しています。

茶臼山自然史館でも、化石の模型作り、葉脈のしおり作り、ザリガニ釣り、ドングリ工作などの参加型の企画を予定しています。

博物館と友の会とで協力して、博物館の空間にいつもとは異なるにぎわいを創出することで、来て見て楽しい場にしたいと準備をしています。

普段博物館に来館されない方々もこの機会に是非足を運んでいただきたいと思います。

博物館まつりの予定【9月23日】

催し	時間
風間神社太々神楽獅子舞の実演 （風間神社太々神楽保存会）	12：00 13：30
ロビーコンサート 邦楽「さんやそう」	13：00 14：30
フリーマーケット	10：00～
焼き物グッズ展示即売ほか	10：00～
天文スライドショーほか	10：00～

【9月24日】

催し	時間
大道芸（バルーンアートなど） （チャレンジ同好会）	12：00 13：30
ロビーコンサート（バイオリンとピアノのデュオ）笠井美智子さんほか	13：00 14：30
フリーマーケット	10：00～
焼き物グッズ展示即売ほか	10：00～
天文スライドショーほか	10：00～

ちょっと見つけた

こんなもの

信更支所がある原市場から少し北に行ったところに境新田という20数戸の集落があります。この集落の西端に小じんまりとしたお宮がひっそりとたたずんでいます。

このお宮は愛宕神社で、その境内で見つけたのが写真の石像です。甲冑姿で馬にまたがり、右手に錫杖を持ち、左手は少し先が欠けていますが宝珠のようなものを持っています。ずいぶんものものしい格好ですが、その表情や全体的にデフォルメされた姿は、どこことなくユーモラスな印象を与えます。地元の人が將軍さまと呼び、愛宕さまのお付きだと言うこの石像は、どうやら勝軍地蔵のようです。

勝軍地蔵は鎌倉時代ころにおこった信仰で、^{ほんのう}煩惱に打ち勝つ地蔵という意味があり、その名から戦勝をもたらす神様として、武士からの崇敬を受けました。そのため、その姿も勇ましく描かれるようになったのでしょう。勝軍地蔵は

また、^{しんぶつこんこう}神仏混淆の時代には愛宕権現の^{ほんしんがつ}本地仏とされていました。境集落の將軍さまが愛宕社境内にあるのも、このような理由からでしょう。

境の愛宕社は寿命神さまとも呼ばれています。火伏せの神としてはもちろんですが、どちらかと言えば寿命の神様、ならびに子供の守り神様として信仰されています。集落内の子供の産まれた家では宮参りには愛宕社へ行き、その途中で、家々にお神酒を振舞い、皆からの祝福を受けます。子供の守り神である愛宕社のお付きである將軍さまもまた、子供が健やかに育つのを見守っているのでしょう。小さいころに、あの馬の首の上に乗って遊んだ、という古老の思い出話は將軍さまの性格をあらわしているように



思えるのですが。

（細井雄次郎）

スターウォッチング & 望遠鏡工作教室

【大気の汚れ具合を星で測る】

美しい星空はどこへ行ってしまったのでしょうか？
ご心配にはおよびません。私たちの頭上にちゃんとあります。では、どうして星がよく見えないのでしょうか？それは、星と私たちの間に妨害しているものがあるのです。それは「大気の汚れ」と「夜空を照らす光」です。

星空の観察をすることによって大気環境の状態を調べるのが「全国星空継続観察（スターウォッチング・ネットワーク）」です。環境庁などの主催で昭和63年から続いている事業で、長野市も環境管理課と博物館が共催で平成元年から参加しています。毎年夏・冬それぞれ1回ずつ行われています。

平成12年度夏のスターウォッチングを7月22日（土）に長野市立博物館で行いました。

【望遠鏡工作教室】

星空観察に先駆けて、午後4時から望遠鏡工作教室が開かれました。5cm×7倍という望遠鏡を作ることから始まりました。この望遠鏡は夜に行われる星空観察に活躍するもので、構造的には簡単ですが、驚くほど性能がよい望遠鏡です。

親子32人が教室に参加し、友の会の天文同好会「しの星空散歩会きらきら」の皆さんと環境管理課の皆さんの指導のもと約1時間かけて立派な望遠鏡を作り上げました。さあ、いよいよその望

遠鏡で観察です。

【スターウォッチング—星空観察】

プラネタリウムの中で星の勉強をしたあと、前庭に出て、こと座のベガ（織姫）とその近くにある小さな三角形の中の星を観察しました。ベガは天頂近くにあるため観察しにくいのですが、1時間ほどで全員観察を終了しました。参加者もこれほどじっくりと星の観察をしたことがなかったようで、星と親しむことと、大気の問題を肌で実感することができた有意義な1日でした。継続して観察に参加してもらえることを願います。

（大蔵 満）

【参加者の声】

☆いろいろな星を学校で調べました。でも、こんな細かい星は初めてでした!! （9歳）

☆いろいろな星が見えてとても良かったです。（10歳）

☆星などは前から好きだったけど、今日見てみて、もっと好きになった。家でも星をたくさん見たいと思う。（11歳）

☆こんなに星を見たのは、初めてでした。（7歳）

☆おもしろくて、むずかしかった。（9歳）

☆ベガなどのある場所を知ることができた。（8歳）



望遠鏡工作教室



星空観察